



Title	『人と動物，駆け引きの民族誌』 奥野克巳 [編著] (はる書房, 2011年, 274頁, 2,415円)
Author(s)	大館, 大學
Description	書評
Citation	哺乳類科学, 52(1), 146-147
Issue Date	2012
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49560
Type	article
File Information	52_146.pdf



で本書は進行していく。教科書としての要素も十分考慮してのことだろうが、各章の終りには「論考を深めるための話題と設問」として様々な問題提起がなされている。当然模範解答などない。我が国の教育現場では教授型の授業が大半を占めるが、考える力を養う問題解決型の観点が考慮されたこの部分は、本書において多くの紙面が割かれているわけではないが、内容の理解を深め発展させるという役割において十分な存在感をもっている。最大限活用して、大人数で議論してみるのも良いであろう。

各論の内容は、どれも動物園というものを考える上では切っても切れないものである。近年、動物園の生物多様性保全における役割が大きくなってきていることもあり、第十章では保全と題して、生物多様性、生息域外保全、生息域内保全、再導入などが具体的に分かりやすく解説されている。動物種によっては人工繁殖も含めて飼育下での繁殖が困難なものもあるが、運よく増やせたとしても、その後それらの個体を適切に効率良く再導入するには多くの障壁が待ち構えている。生物多様性保全というものがそう単純なものではなく、基準に基づき計画的に遂行される必要性と、その一旦を担う動物園の価値というものを再認識する機会となる。

本書の第十四章に「研究」という章がある。研究というものが大学や研究機関だけのものではないことを、章のタイトルにすることによって、本書は明確に主張している。米国でも経済的そして専門スタッフの欠如といった様々な理由から、全ての動物園が動物園独自の研究を十分に遂行できているわけではない。しかし既に1998年の段階で、64%の動物園が自前の研究ガイドラインをもち、90%が研究委員会もしくは研究部局を備えているということには驚きである。我が国では、大学や研究機関において倫理を含めた独自のガイドラインがやっと整い始めてきたが、米国の動物園の過半数以上がガイドラインをもっているというこの現実には、研究に対する動物園自身の自覚と使命感の現れであろう。我が国の動物園運営（行政）が、様々な場面で無能な行政官が溺愛し、愛して止まない“先送り”や“傍観”という結果になってしまっていないだろうか？動物園関係者には、“Global standard”や“Innovation”を合言葉に、彼らの意思を阻むさまざまな外圧と闘いながら、将来を見据えた理想の動物園を構築して欲しい。

これまでに、動物学、栄養学、獣医学、保全生物学といったように個別の学問体系を参考に動物園または動物園動物を考えることはあったが、本書のように動物園、それ自身を中心に学問体系を組み立てた書はなかったであろう。そのようなことから、この書は動物園を理解

するための様々な“宝物”を一度に手に入れることのできる良書となる。

佐々木基樹（帯広畜産大学基礎獣医学研究部門）

✉ sasakim@obihiro.ac.jp

『人と動物、駆け引きの民族誌』

奥野克巳〔編著〕

（はる書房、2011年、274頁、2,415円）

今回紹介する「人と動物、駆け引きの民族誌」は、哺乳動物が重要な研究対象ではあるものの、真の研究対象は文化人類学的に見た「人間」である（もっともヒトも哺乳動物であるが）。哺乳動物に対する人間の眼差しを考えることは、我々のような哺乳類学者にとっても、自分自身の研究活動を客観的に見ることにつながるだろう。『哺乳類科学』の読者にも本書に興味を示す人が少なからずいる、いや興味を持って頂きたい、と思い筆をとった。

本書は人と動物との駆け引きについての文化人類学的研究の論文集であり、5部構成で7章の論文から成っている。第1部は「人と野生動物」と題して、ボルネオ（奥野克巳）およびパプアニューギニア（吉田匡興）の狩猟民と狩猟獣の駆け引きについて述べられている。前者では動物を狩ることにはカミ（神）が介在していること、後者では男らしさの象徴として狩猟が行われていることが論考されている。第2部は「人と儀礼動物」と題して、ラオスの農耕民による水牛の供儀儀礼（西本 大）と、中国西部のモンゴル族などの牧畜民における“食べない家畜”のセテルという儀礼（シンジルト）の2章を収録している。前者では潜在的に人間に対して反抗可能なスイギュウを神と人間をつなぐ介在者として、いたぶりながら殺していく儀礼を分析している。後者では、身内や自分に不幸などがあった場合、特定の家畜個体を食べないことを前提として扶養するセテルという風習について解説をしている。第3部は「人と飼育動物」と題して、コモロ（花潤馨也）およびエチオピア（田川 玄）における牛に対する宗教的観念について述べられている。離島であるコモロでは野生哺乳類の生息種数が極端に少ないが、住民は何種類かの家畜を飼養している。その中でも、その巨体さゆえか、牛は畏怖の対象ともなっている。そして、牛に似た妖怪が人に憑依する現象についての研究が紹介されている。エチオピアの章では牛に対する多数の呼称と供儀儀礼の関係についての論考がなされている。第4部は「人と実験動物」というタイトルで、他の部とは異なり、ひとつの章「エピクロス末裔たち」（池

田光穂)で構成されているが、この章については後に詳述する。

以上のように本書における「駆け引き」の内容は多岐に渡っている。また、各章の調査地が著しく多様なため、人と動物の駆け引きについて一般的論議をするには、いささか無理があるという印象も受ける。さらに第2部と第3部をあえて分ける必然性があったのか、私には多少疑問が残る。しかし本書の内容は、多くの哺乳類学者にとっては新鮮な情報であり、哺乳類に対する人間の認識と扱いについて示唆に富んでいるといえよう。

さて、『哺乳類科学』の読者の多くは自然科学論文のスタイルに慣れており、本書のような人文科学の論文には不慣れであろう。そのような読者は、本書に掲載されている論文の多くが一人称で書き進められ、独特な文学的表現や婉曲的な言い回しがしばしば用いられていることに面喰らうだろう。非科学的であり、客観性が欠如しているのではないかとさえ感じるかもしれない。しかし、自然科学の論述法が客観的・科学的に真実を述べているという保証はどこにもないし、そもそも主観を完全に排除することはなし得ない。つまり、本書のような論述スタイルにも理由がある。このような異分野における学問の文法を学んでみることも勉強になるであろう。

本書で扱っている“動物”は、狩猟獣、家畜、実験用哺乳類であり、すべて哺乳動物である。第1章で鳥や虫への言及もあるが、あくまで端役でしかない。従って、本書の実質的な内容は「人と“哺乳動物”、駆け引きの民族誌」である。しかし、狩猟や飼育動物としては鳥類も重要な対象である。また、動物との駆け引きと言えば、ヘミングウェイの『老人と海』を引き合いに出すまでもなく、魚類も重要な相手である。人と動物の関係ないしは動物観を一般化するには、哺乳動物だけでなく、鳥類、爬虫類、魚類、昆虫類、海産無脊椎動物など他の「動物」との関係も必要であろう。しかし、当事者や観察者が、人間と駆け引きをしていると最も実感しやすい相手は哺乳動物であることも間違いあるまい。

人間と動物の関係といえば、多くの人が想定するのは、本書のほとんどの章で扱っている狩猟獣や家畜と人間の関係であろう。ところが、最後の章では実験動物と研究者の関係という、我々の意表を突く事例を扱っている。この章ではなんと日本の大学の神経生理学の研究室が文化人類学の研究フィールドとなっている。神経生理学者は研究遂行のためにネコなどの実験動物を大切に扱い、実験を行い、やがて死に至らしめる。彼ら研究者の実験動物に対する扱いは、愛玩動物に対する人間中心主義の扱いよりもずっと誠実になされている、という池田氏の

指摘は興味深く示唆的であった。私はこの章を読んで、是非とも本書を『哺乳類科学』で紹介したいと決意したのである。哺乳類研究者も自分と対象動物の関係を一考してみる価値がある。この章を“締め”にもってくるあたり、編者の奥野克巳氏の思慮深さに感心する。

最後の章での研究事例のように、われわれ哺乳類研究者自身を、文化人類学的な「研究対象」とする研究も挑戦的な興味深いテーマではないだろうか。何故ならば、動物の研究者の中でも、哺乳類という自分と同類の動物を研究対象にした哺乳類学者は、他の生物を対象とした研究者に比べて、対象生物に対する思い入れや感情移入が高いのではないかと私は感じている(特に霊長類や大型獣研究者でその傾向があるようだ)。しかし、そのことを実証した研究例は(多分)なく、文化人類学者には是非ともこのことを実証的に調べていただきたい。それは我々自身の研究スタイルを客観的に知るためにも必要なことであろう。今後、もしそのような文化人類学者が現れたら、心広い皆様には積極的に「研究対象」となって頂きたいと思う次第である。

大館大学(北海道大学低温科学研究所)

✉ ohd@pop.lowtem.hokudai.ac.jp

『ブルドッグ—その意外な歴史—』

河村玲奈・河村善也 [著]

(インデックス出版, 2011年, 102頁, 1,000円)

本書は、ブルドッグという犬種の辿った数奇な運命の物語である。現在、ブルドッグは愛玩犬とみなされているが、もともとはウシと闘うために作り出された猛猛な犬種であり、その目的ゆえの過酷な運命が存在していた。

あとがきによれば、本書は著者のひとりである河村玲奈氏の大学時代の卒業論文がもとになっているという。そこからさらに資料の収集を進め、さらに本誌の読者の皆様も良くご存じであろう古脊椎動物の専門家である河村善也氏が自然科学の立場より多くの項目を書き加えて本書を完成させたとのことである。そのため、ブルドッグとそれを生み出す土壌となったアニマルファイティングの歴史を語るその筆致は瑞々しい感性に溢れるだけでなく、科学的な側面からの解説も充実している。

第1章から第3章までは、ブルドッグの犬種としての特徴や、イヌの家畜化の歴史、そしてブルドッグの祖先となった犬種の歴史が語られる。ブルドッグの理想的な形質として、どのような項目が重視されているかが詳細に記されているほか、コラムで分類学的な解説もなされ